

# 古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ

岸\* 根 敏 幸

はじめに

周知のように、古事記神話や日本書紀神話に代表される日本神話には、アマテラスがスサノヲの乱行に堪えかねて、天の石屋（日本書紀神話では天の石窟）に籠もってしまい、その結果、世界全体が日の射さない夜の状態になってしまったという、いわゆる「天の石屋籠もり」<sup>①</sup>という話が登場している。

この話についてはこれまでに、日食や冬至という自然現象の起源を述べたものであるとか、鎮魂祭という祭祀の起源を述べたものであるなどという指摘がなされている。<sup>②</sup> たしかに、この話をそのような自然現象や祭祀の起源を説明

するものと捉えることも決して的外れなことではない。それどころか、比較神話学の視点から、世界各地に分布する日食・冬至神話の全容を知る一環としてアプローチすることや、日本宗教史の視点から、日本の祭祀の起源を解明する一環としてアプローチすることには十分な意義があるだろう。

しかし、『古事記』あるいは『日本書紀』にしても、様々な成立背景をもつてはいるが、それらは完結した一つの作品として存在しているものである。一続きの物語によって紡がれている古事記神話あるいは日本書紀神話（特に本文神話）の中でこのような話が登場している以上、それを単に自然現象や祭祀の起源を説明していると指摘して、作品の枠を超えた外的な事象と結びつけて考察するだけでは不十分なのであって、古事記神話あるいは日本書紀神話とそれぞれそれぞれの物語の構想の中で、なぜそのような話が登場しているのか、その意味が問わなければならないのである。

本稿では、特に古事記神話に焦点をしばって、天の石屋籠もりという話の意味づけについて改めて考察したいと思う。

## 一 アマテラスの孤立

根の堅州国に行きたいという希望を押し通したスサノヲは、旅立つ前に、姉のアマテラスに暇乞いをしようと高天

原へと向かった。しかし、神名中の「スサ」にも示されているように、天変地異を引き起こして、凄まじい勢いで近づいてくるスサノヲに対して、アマテラスは、自分が統治している高天原を横取りする野心があるのではないかと警戒し、スサノヲの来訪に対処するための準備をした。それは鎧や弓矢などを身につけて武装し、力で立ち向かうというものであった。

しかし、この記述に関しては不自然と思われる点がある。もしアマテラスが高天原の統治者であったならば、当然、アマテラスの指示に従う神々がいたはずと思われるが、その形跡を示すような記述はなく、アマテラスがたった一人でスサノヲに立ち向かっていったことになっているのである。普通に考えれば、統治者がそのような行動をとって、自分を真っ先に危険にさらすとは考えにくいであろう。

アマテラスに矢を向けられたスサノヲは、自分にそのような野心はないと釈明するが、アマテラスがそれを信じなかったため、ウケヒという呪術をおこなって、身の潔白を証明しようとした。ウケヒの結果、スサノヲが高天原を横取りする野心がないということが示されたものの、スサノヲはそれを自らの勝利であると履き違えて調子に乗り、高天原で乱行をするに至った。

スサノヲの乱行は古事記神話の記述の順番に従うならば、①田の畔道を破壊する、②灌漑用の溝を埋める、③大嘗の祭事をおこなう建物を排泄物で汚すというものであるが、アマテラスはそのとき、①と②については、田を広くして活用するためにおこなったのである、③については、大嘗の祭事に打ち込んで飲酒し過ぎたため、吐いて建物を汚

してしまったのである、というように、スサノヲの行為について説明している。

この説明は以前論じたように、<sup>(3)</sup>スサノヲを弁護するためにおこなったものとは考えにくいであろう。というのも、アマテラスの説明は強引なこじつけに他ならず、到底、スサノヲの行為を正当化するようなものにはなりえないであろうし、その場にスサノヲとアマテラス以外の神々がいて、スサノヲの行為を非難しているというような形跡がなく（もつとも、そういう形跡を記述していないだけで、非難する者がいなかったとは必ずしも言い切れないが）、したがって、そもそもスサノヲの行為をよく見せようとして弁護する必要などないと思われるからである。

つまり、アマテラスの説明は弁護を意図するものではなく、スサノヲのおこなった悪しき行為を、言葉に内在する「言霊の力を用いて、正しい行為に変えようとしたものと考えられる。それが「詔り直し」である」と述べられているように、文字通り、言葉によって、曲がったものを真っ直ぐに直そうとしているのである。それでは、なぜそのようなことをするのであるうか。それはウケヒによってスサノヲの身の潔白が証明されたからであろう。ウケヒをおこした以上、その結果に従わざるをえない。さもなければ、その意思を占った神の怒りを買うことになるのである。

しかし、「詔り直し」による努力も空しく、スサノヲのさらなる乱行によって自分にまで危険が及んできたとき、それを恐れたアマテラスはすべてを擲って、天の石屋に籠もってしまう。アマテラスはたった一人でスサノヲに対処しようとして、最後は力尽きてしまったのである。

このやりとりの間、アマテラスは常に孤立した存在であり、アマテラスに協力しようとする高天原の神々は、古事

記神話の記述をみるかぎり、誰もいかなかったと言わざるをえないのである。もしアマテラスが本当に高天原の統治者であったならば、このような事態は想像しにくいことであろう。<sup>(4)</sup>

## 二 「修理固成」という命令

天の石屋籠もりの話に進む前に、そもそもアマテラスはなぜ高天原に赴き、そこを統治することになったのか。それに至るまでの経緯について検討しておく必要があると思われる。本章ではこの点について扱うことにしよう。

このアマテラスはイザナキが地上の世界において単独で誕生させた子である。イザナキは妻イザナミとともに、地上で漂っている国の「修理固成」<sup>(5)</sup>を行うようにという天つ神からの命令を受け、夫婦で子どもを生むという形で、大八嶋国などの大地や、その大地に関連する海、山、川などの成立を表す様々な神を生み出していった。イザナミは火の神を生んだ際に負傷し、それによって死んでしまうことになるが、その後はイザナキが単独で子を誕生させ続け、最後にアマテラス、ツクヨミ、スサノヲからなる三貴子<sup>みはしらのたみこ</sup>を誕生させたのである。

この三子が他の子たちとは違って、「貴き」という形容がなされている理由は、古事記神話で必ずしも明示されているわけではない。<sup>(6)</sup>しかし、この三子が各々、他の子たちとは違って、イザナキから統治すべき場所を委ねられている点に着目するならば、統治者とするにふさわしいような子を特に「貴き」と形容しているのではないかと推定する

ことができるであろう。

そして、アマテラスは高天原の統治を委ねられることになるのであるが、この点について改めて考えてみると、イザナキに、高天原の統治をアマテラスに委ねるような権限が果たしてあったのかという点が問題になるように思われる。というのも、前述のように、イザナキに「修理固成」という命令を与えたのは天つ神、すなわち、高天原にいる神なのであって、アマテラスが高天原の統治者になるということは、事実上、そのような天つ神の頂点に立つということの意味することになるからである。天つ神から命令を受ける立場にあるイザナキに、その天つ神の上に立つような高天原の統治者を指名することが可能であったのかという点が問題なのである。第一章でアマテラスの孤立について言及したが、高天原の統治者であるはずのアマテラスに付き従う天つ神が全く存在していないように思われることも、この問題と何らかの関連があるのではないかと推定されるのである。

それではなぜ、イザナキはアマテラスに高天原の統治を委ねようとしたのか、そして、そのようなことを可能にする何らかの論理が古事記神話の中に存在するのであるのか。そこで十分考慮しなければならないのは、前述の「修理固成」という命令の具体的な内容である。

この「修理固成」という表現については、それを構成する語群の『古事記』における用例を調べることで、その意味を探ろうとする試みもなされているが、<sup>7)</sup> そのような試みから「修理固成」の意味を厳密な形で特定することは困難であるように思われる。というのも、「つくろふ」「かたむ」「なす」など、各々の表現自体があまりにも漠然としていて、

意味内容を具体的に特定しにくいからである。この表現を構成する語群から判断して、地上の国土をしっかりと形あるものに作り上げようとするニュアンスは当然、読みとれるのであるが、用例に基づくアプローチがそれ以上の知見をもたらすことはあまり期待できないであろう。したがって、古事記神話の記述から「修理固成」について確認できる知見を踏まえて、それについて論理的に考察するという方法が新たに必要になってくるのである。

そこで、古事記神話の記述から確認できるのは、「修理固成」という命令が天つ神からイザナキとイザナミに与えられたものであること、そして、古事記神話が明確な意図をもち、一つの完結した物語であるということを前提にして、普通に考えるならば、その後、イザナキとイザナミがおこなったことは、この「修理固成」の命令に沿うものであったということ、以上の二点になるであろう。

そして、前者からは、イザナキが三貴子を誕生させた後、「淡海(または淡路)の多賀」という場所に留まった——つまり、これは役割を終えて、隠棲したということを意味するのであろう——時点で、イザナキが「修理固成」という命令を果たし終えたということが理解され、後者からは、イザナキとイザナミが（後にはイザナキ単独で）おこなったことが「修理固成」の具体的な内容であるということが理解されるのである。

これらの知見について論理的に考察して、特にイザナキがアマテラスに高天原の統治を委ねたことに関しては、次のような二つの指摘をすることができると思われるのである。

第一の指摘は、イザナキがアマテラスに高天原の統治を委ねたことは、少なくともイザナキにとつては、それが「修理固成」の意図を達成する天の石屋籠もりの意味づけ（岸根）

「理固成」の命令に沿うものであると認識されていたという点である。もしそうでないとすれば、イザナキの行為は、天つ神の命令に従わないばかりか、その天つ神の上に立つような高天原の統治者を定めようとしたという点で著しい越権行為になってしまうであろう。

第二の指摘は、地上にある葦原の中つ国の統治者を定めることが「修理固成」の具体的な内容に含まれていないのではないかという点である。従来、先行研究、そして、他ならぬかつての筆者もそうであったが、地上の国土をわざわざ作っておきながら、なぜイザナキはその統治者を定めようとしなかったのかということの問題にしてきた。<sup>⑨</sup>しかし、イザナキの行為が「修理固成」の命令に終始一貫して基づいているのであれば、葦原の中つ国の統治者を定めなかったことは、それがイザナキの役割ではなかったということにならないだろうか。そのように考えた方がはるかに自然なことのように思われる。というのも、それが「修理固成」の命令に含まれているとイザナキが認識していたならば、その任務を果たさないうで隠棲したということは考えにくいからである。<sup>⑩</sup>

論理的な考察からこれらの指摘をしたのであるが、それが妥当であるとするならば、アマテラスに高天原の統治を委ねることが、なぜ「修理固成」の命令に沿うものとなりうるのかという更なる問題に直面することであろう。その問題を解明するためには、アマテラスがどのような神であるのか、その神的性格を把握しておく必要があると思われる。



### 三 アマテラスの神的性格

第二章で述べたように、イザナキはイザナミとともに国生みに着手し、イザナミが死んだ後も単独で、統治を委ねるにふさわしい三貴子を生んだ。そして、イザナキはアマテラスに高天原、ツクヨミに夜の食国、スサノヲに海原の統治を委ねたのである。『日本書紀』の編纂者が正式な神話として認めている日本書紀本文神話とは異なり、古事記神話ではアマテラスに特化して、その素晴らしさを直接的に語る記述はないが、イザナキがアマテラスだけに、自らが身につけていた御頸珠（これは「ミクラタナの神」という神名をもつ稲霊のことであるとされる）<sup>12</sup>を与えている点を考慮するならば、古事記神話においても同様に、アマテラスこそ最も重視されている神であると推定することができるであろう。そのアマテラスが高天原の統治を委ねられているのである。

アマテラスは古事記神話において「天照大御神」と表記されている。これに対して、日本書紀神話にはこの神に対応するものとして、「日神（または日神尊）」（第五段本文、第六段別伝第一書・第三書、第七段別伝第二書・第三書）、「大日靈貴」（第五段本文）、「天照大神」（第五段本文、同段別伝第六書・第十一書、第六段本文、同段別伝第二書、第七段本文、同段別伝第一書、第九段本文、同段別伝第一書・第二書）、「天照大日靈尊」（第五段本文）というように、多くの呼称が挙げられている。本文神話ではほとんど「天照大神」という呼称で言及しているが、別伝神話には「日神」という呼称で言及する伝承もかなり存在している。これに対して、古事記神話ではそのような多様な呼称に全く

古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ（岸根）

言及することはなく、古事記神話に全部で二十九回現れるアマテラスへの呼称のうちで、たった一回の例外を除いては、「天照大御神」という呼称で統一されているのである。<sup>14</sup>

それでは、「天照大御神」という呼称がどのような意味をもっているのであろうか。改めてその意味について考察しておきたいと思うが、この「天照大御神」は「天照」と「大御神」の二つに分けて考えることができるであろう。以下では各々の意味について考察し、その後、全体の意味についても考察することにした。

まずは「天照」という語についてである。従来、「照」を「照らす」という動詞として捉えるか、あるいは、「照る」という動詞と尊敬の助動詞「す」が結びついたものとして捉えるかという意見の違いはあるものの、「天」と「照らす」の関係については、天を場所として捉えて、「天で照り輝く」と解釈しようとする点で、ほとんどの先行研究は一致していると言える。しかし、解釈の可能性として、天を場所ではなく、対象として捉えて、「天を照らし出す」と解釈することもありうるのではないかと思われる。自らが照り輝くということは同時に、周りを照らし出すことにもなるので、結局は同一の現象を違う視点から表現しているだけにすぎないと言えるかもしれないが、前者ではアマテラスの本質そのものに注視するのに対して、後者ではアマテラスの働きに注視しているという——いわば「体」と「用」の関係のような——ニュアンスの違いを見出すことができるであろう。このように「天照」を「天を照らし出す」と解釈する可能性を一つの試みとして提起しておきたいと思う。<sup>17</sup>

「天照」とはアマテラスを、この世界で比類なく崇高な存在として捉えられたに違いない太陽になぞらえた表現で

あると言つてよいであろう。先行研究では、古事記神話にはアマテラスの太陽神的性格が見出されないとし、さらには、日本書紀本文神話に見られるそのような性格を古事記神話では薄めようとしているという指摘さえあるが、そのような見解が果たして妥当なものと言えるであろうか。むしろ、筆者にとって実際はそれとは正反対なのではないかと思われる。現代のような煌びやかな照明などのない古代において、照らすというのは太陽（月もそれに準じるが、その力強さという点では太陽にはるか劣るであろう）がもちうる特権であると言つてよいであろう。

古事記神話におけるアマテラスという神は、まずもつて太陽と密接に関係するということがその中核にあり、そこから派生する形で、「農耕神」や「皇祖神」などの様々な性格が生み出されているのではないかと思われる。言うまでもなく、農耕にとつて太陽は必要不可欠な存在であり、また、後の天皇家へと繋がる神々の系譜は、「天津日高」や「日子」などの表現に示されているように、その崇高さを強調するために、常に太陽と結びつけられて捉えられているのである。

大地の誕生でさえも男女の生殖によつて成り立つたとする記述や、黄泉つ国という死の世界を、現実から遊離した抽象的なものとしてではなく、死者を葬る埋葬地と不可分なものとして捉えようとする記述など、古事記神話から窺い知れる古代日本人の思考方法は極めて具象的であると言つてよいであろう。これらと同様に、アマテラスのもつ比類ない崇高性という性格についても、この世界における太陽という比類なく崇高な存在を具体的な裏づけとしていなければ、到底、成り立ちえないものであったと考えられるのである。

ただし、アマテラスが太陽と密接に関係するからといって、アマテラスと太陽をそのまま同一視するということは短絡的な発想と言わざるをえないであろう。もしアマテラスが太陽であるとすれば、イザナキがアマテラスを誕生させるまでは、この世界に太陽が存在していなかったということになってしまふからである。その結果、天と地の分離からイザナキとイザナミによる国生みに至るまでの営みがすべて暗闇の中での出来事となってしまうわけ、そのような状況を実際にイメージすることは難しいのではないだろうか。何も見えない暗闇の中で世界が成立してゆくというのは、不自然なように思われるのである。したがって、そうではなく、この世界の成立（この場合の世界とは現代のような宇宙全体をも表すようなものではなく、天と地の分離によって成立した神話上の世界のことである）に先だつて太陽がすでに存在し、その太陽によって明るく照らし出された中で世界が成立していったと考えるべきであろう。<sup>19)</sup>

さらに、そもそも太陽（月やそれ以外の星も当てはまる）は神話の開始点となる世界の成立とは基本的に無関係であり、それを超越した存在であると思われる。古事記神話では、天と地が分かれ、地上の世界では、対応する神を生むという形で、海や山などの自然物が成り立っていく様子が描かれているが、これらはその世界に属するものなのである。しかし、太陽はこれらの自然物とは本質的に区別されるであろう。なぜなら、太陽はこの世界に属するものではないからである。この世界が成立する以前から太陽は存在していたし、この世界が消滅したとしても、太陽は存在しているのである。

したがって、この世界が成り立っていく過程で誕生する神を太陽そのものと同じ視することは難しいであろう。前

述の「太陽と密接に関係する」というのは、本来、この世界に属していない太陽をこの世界と結びつける役割を果たすという形で捉えることができるのではないだろうか。太陽神としてのアマテラスというのはそのような役割をもっていると思われるのである。

それは具体的に言えば、太陽の光りを司るということになるであろう。月の神であるツクヨミと協力しながら、一日を昼と夜に分けて、各々を司るといったことが考えられるのである。ただし、このような解釈については、アマテラスやツクヨミの誕生以前に、一日に昼と夜の区別がなかったのかという疑問が存在しうるであろう。<sup>20)</sup>

つぎは「大御神」という語についてである。そもそも古事記神話において神に対する言及の仕方、①神名だけを示す、②神名に、敬称のような言葉を付加して示すという二通りが存在するが、②はさらに、「命」という語を付加するもの、「神」という語を付加するもの、「大神」という語を付加するもの、「大御神」という語を付加するものという四種類に細分化される。この四種類のなかで、敬意の程度としては、「命」や「神」より「大神」の方が優越し、「大神」よりも「大御神」の方が優越すると考えてよいであろう。

「大御神」という語はアマテラス以外にもイザナキとアヂスキタカヒコネに使用されているが、後者の神々については、以下に示すような、いわば条件付きでそう呼ばれているにすぎない。

イザナキの場合、最初の登場時には「神」、それ以降は「命」という語が付加されていたが、<sup>21)</sup>「大神」という語も付加されており、三貴子の各々に統治を委ねた後は、「大御神」という語が付加されている。つまり、イザナキは「修

「理固成」の命令を成し遂げた功績によって、最終的に「大御神」と呼ばれるようになったと考えられるのである。

アヂスキタカヒコネの場合、古事記神話では基本的に「神」という語が付加されているが、オホクニヌシの子孫について語る記述の中でこの神を説明するものとして、「今、迦毛の大御神と謂ふぞ」という一文がある。<sup>(22)</sup> この文章中の「今」とは『古事記』が編纂された今であり、それは、古事記神話の中に出てくるアヂスキタカヒコネという神が、今では「迦毛の大御神」と呼ばれているという意味なのであって、古事記神話の話の中でアヂスキタカヒコネが「大御神」と呼ばれていたわけではないのである。

したがって、古事記神話で無条件に、「大御神」と呼ばれているのはアマテラスだけなのであり、イザナキとアヂスキタカヒコネを「大御神」と呼ぶ場合があることと、アマテラスを「大御神」と呼ぶことをそのまま同列に扱うことはできないのである。

以上のように「天照大御神」という呼称について考察した。そこから理解されるアマテラスの神的性格とは、まずもって、比類なく崇高なものとして仰がれる太陽との密接な関係であり、そのような関係があるために、古事記神話において他の神とは比較にならない崇高性を帯びているのである。その点で、先行研究に見られるような、アマテラスを至高神として捉えようとする指摘にはある程度同意できるが——ただし、古事記神話には「至高神」という概念は馴染まないと思われる。なぜなら、アマテラスもまた神を祭る存在だからである——、その性格を太陽という存在と切り離して、ただ単にひたすら崇高な存在であるとする指摘には同意しかねる点がある。<sup>(23)</sup> そのような抽象性は、古

事記神話から窺い知れる古代日本人の実感には、おそらくそぐわないであろう。アマテラスは太陽と結びついているということとその中核とすることによって、常に「大御神」と呼ばれるような、比類ない崇高性が確保されていると言えるのである。

#### 四 イザナキによるアマテラスへの高天原統治委任

比類ない崇高性をもつアマテラスを統治者にしていけば、葦原の中つ国の統治は容易に実現するようと思われるかもしれないが、第三章で指摘したように、イザナキはアマテラスに高天原の統治を委任したものの、葦原の中つ国の統治者を定めようとはしなかった。そして、そのことが「修理固成」という命令に沿うものであると認識していた——正確に言えば、古事記神話の編纂者がそのように認識していた——と思われるのである。それでは、アマテラスに高天原の統治を委任することが、どうして「修理固成」の命令に沿い、その一環として位置づけられることになるのだろうか。

この問題を明らかにするには、アマテラスが古事記神話におけるその後の記述でどのような役割を果たしているのかという点に注目する必要があるだろう。すなわち、古事記神話では以下に示すような記述が表れるのである。

アマテラスは、オホクニヌシによる葦原の中つ国の国作りが終わるや否や、次のような発言をしている。<sup>24</sup>

古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ（岸根）

豊葦原の千秋の長五百秋の水穂国は、我が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳の命の知らず国なり。

さらに、アマノオシホミミが葦原の中つ国の統治を自分でなく、子のホノニニギに代わってもらうべきであると進言した際には、タカキという神（これはタカミムスヒが名前を変えたものである）とともに、ホノニニギに次のように発言している。<sup>(25)</sup>

此の豊葦原の水穂国は、汝が知らさむ国なり。

これらの発言は、葦原の中つ国の統治者がアマテラスによって定められたということを明らかに意味しているであろう。<sup>(26)</sup> アマテラスの果たしたこのような役割から遡及して考えるならば、アマテラスは葦原の中つ国の統治者を定めるために、イザナキによって誕生させられた神であると指摘することができないのではないだろうか。

イザナキが天つ神から「修理固成」という命令を受けて、葦原の中つ国という地上の国土を作ったにも拘わらず、その国土の統治者を定めなかったという点は一見、不可解なことのようと思われるが、第二章で述べたように、それはそもそもイザナキの役割ではなかったと思われる。イザナキの役割はあくまでも葦原の中つ国の統治に向けた準備をすることであったと言える。そのために、葦原の中つ国の統治者を定めるにふさわしい存在であるアマテラスを誕生させたと考えられるのである。

では、なぜアマテラスが葦原の中つ国の統治者を定めることができるのかというと、それは第三章で示したような、アマテラスの神的性格である比類ない崇高性に求められるのであろう。そのようなアマテラスによって定められた者



のみが、アマテラスという存在を權威とすることで、葦原の中つ国の正統な統治者となりうるのである。

世界各地の神話・伝承などを見ても、地上の国土における統治の正統性を、神のような超越的な存在者の權威に求めようとする場合が多い。たとえば、古代中国の皇帝は「天子」と呼ばれ、全世界を司る天（あるいは天帝）によって、地上の国土を統治する天命を与えられた存在として位置づけられているし、古代のギリシャ、ペルシャ、ローマなどの王たちが神の子孫として位置づけられている場合も多いし、ヨーロッパの中世以降には、王の權威は神によって与えられたものであるとする王權神授説が唱えられているのである。

古事記神話では、高天原の統治者にして、すべてを照らし出す比類ない崇高性をもつアマテラスによって葦原の中つ国の統治者が定められている。その点は古代中国における天と天子の關係に近いものがあるが、古事記神話の場合、それだけではなく、正統な統治者となる条件としてアマテラスの子孫であることが加えられていると言える。<sup>27</sup>したがって、古代中国のように、易姓革命という形で、これまでとは血統を全く異にするような統治者が出現するということは原理上、ありえないのである。

このように、古事記神話において、イザナキがアマテラスに高天原の統治を委ねたということは、アマテラスがこの世界で比類なく崇高な存在であるということを端的に明示しているのであり、そして、それを根拠とすることによって、葦原の中つ国の統治者を定めることが可能になるのである。すなわち、アマテラスによって定められ、その權威を受け継ぐアマテラスの子孫のみが正統な統治者となりうるのである。

## 五 アマテラス誕生以前の太陽神、高天原の統治者

九〇二

第二章から第四章までの考察によつて、アマテラスに高天原の統治を委任することが、イザナキが天つ神から命じられた「修理固成」の命令の一還として位置づけられ、アマテラスはその比類ない崇高性によつて、葦原の中つ国の統治者に權威を与えるべく、高天原の統治者として君臨することになる、ということが示されたのである。

しかし、第一章で述べたように、アマテラスによる高天原の統治は天つ神によつて支えられている形跡のない、孤立したものであった。イザナキの意図に反して、アマテラスの統治は決して軌道に乗っていなかつたように思われるのである。もしそのような理解が妥当であるとするならば、何がアマテラスの統治を妨げていたのであろうか。

その問題は、アマテラスが誕生する以前に高天原がどのような状態であつたのかという問題と密接に関連しているように思われる。もしアマテラスの誕生以前に、太陽の光を司る太陽神、高天原の統治者が存在していたとすれば、アマテラスの出番はなくなつてしまふからである。そこで、古事記神話に内在する論理的必然性に注目して、アマテラスの誕生以前に太陽神、高天原の統治者が存在していたのかどうかについて考察しておきたい。

まずは太陽神についてであるが、古事記神話はこの世界——この場合の「世界」とは、前述のように、神話において語られている世界のことである——のすべての事象を神と結びつけて捉えようとする点に大きな特色があると言え<sup>(28)</sup>る。海、山、川は言うまでもなく、国土それ自体も神と結びつけて捉えられている。さらには、高天原を文字通り一

つの閉じた世界としてまとめられる中心軸のようなものや、この世界で様々なものを生み出したりする力のようなものさえも、神と結びつけられて捉えられている。極論するならば、古事記神話において、すべてのものは神と結びつけられることによって、その神話体系の中に位置づけられることになるのである。

第三章で述べたように、太陽はこの世界が成立する以前から存在していたと考えられるが、太陽がその神話体系の中に位置づけられ、その光がこの世界を遍く照らし出すためには、太陽の光を司る神の存在が必要となるであろう。アマテラスとはまさにそのような神なのである。しかし、アマテラスの誕生以前に、この世界が光のない暗い状態であったと考えるのは実に不自然であろう。天と地が分離したり、イザナキとイザナミという一対の男女神が成立したり、その二人がお互いの姿を確認し合って結婚したり、イザナキがイザナミの亡骸の前で慟哭したり、イザナキが黄泉つ国の穢れを祓うために、阿波岐原で禊ぎをしたりなどしている。これらすべての事柄が光のない暗い状態でおこなわれたとは到底、考えられないのである。

したがって、アマテラスの誕生以前にも、この世界が太陽の光によって照らし出されていたのであれば、当然、太陽の光を司る神が存在していたに違いないであろう。

つぎに、高天原の統治者についてであるが、アマテラスの誕生以前にも高天原に統治者がいたと考えるべきであろう。なぜならば、高天原というのは一つの閉じた独立の世界なのであり、その世界をどのように存在せしめて、展開させるといことが、全く意思を伴わない無秩序な状況下で行われているとは到底、考えられないのである。

さらに、イザナキとイザナミに与えられた「修理固成」という命令もそのような意思の存在を前提に置くものであろう。古事記神話ではこの命令を与えた状況について「天つ神諸の命以ちて」と記すのみで、誰が与えたのか具体的な神名を示してはいない。この場合、高天原と地上の世界という二つの世界に跨ることなので、この命令を与えたのが必ずしも単独の神ではないのかもしれないが、いずれにせよ、この命令は高天原の誰かが他の神々の同意を得ずに恣意的に与えたものではないであろう。もしそれが高天原の統一された意思でないならば、高天原の成立を記す「別天つ神」の段階を引き継ぎ、生成を具現化するために一對の完成された男女の神の成立を記す「神世七代」の段階を経て、国生みをしようとするイザナキとイザナミの行為の位置づけそのものが不安定なものになってしまふからである。古事記神話のその後の展開から考えてみても、イザナキとイザナミが実行した「修理固成」という命令は、高天原の統一された意思によって与えられたと考えるのが自然なことであろう。

これらのことから、アマテラスの誕生以前にも、高天原に統一された意思があり、そして、そのような意思の存在と結びつけられるような統治者―それが単独であるか、あるいは「別天つ神」のように複数であるかは断定できないが―が存在していたに違いないのである。

以上のように、アマテラスの誕生以前にも、太陽の光を司る太陽神、高天原の統治者のような神がすでに存在していたということが予想できるのであるが、それはいったい誰なのであろうか。この場合の統治者を、あくまでも高天原という世界の出来事に関わることに限定するならば、筆者はタカミムスヒがそのような存在なのではないかと考え



じものであったか、あるいは、現代の私たちが思う以上のものであったであろう。そのような特性から太陽の光を、生成や発展に関わる特別な力であるムスヒとして捉えることは十分考えうるのである。事実、ムスヒは古事記神話において「産巢日」と漢字表記されている。この「日」を、漢字の意味を考慮せずに音だけを利用した借字として捉えるか、あるいは、漢字の意味を考慮した本字として捉えるかについては先行研究でも議論のあるところであるが、ムスヒとは「産す霊」であると同時に「産す日」でもあるという理解が妥当なものと言えるであろう。この世界で生成や発展に関わる特別な力と言え、太陽の光こそがその第一に挙げられると考えられるからである。したがって、タカミムスヒというムスヒの神が、太陽の光を司ってこの世界を照らし出す太陽神として捉えられることに、特に大きな支障はないと思われるのである。

つぎに、「タカミムスヒ」の「タカ（高）」についてであるが、これは「高天原」や「天津日高」の「高」と同様に、位置的に高い場所を意味していると思われる。古事記神話で位置的に高い場所と言え、高天原しか考えられないので、タカミムスヒは高天原と結びつけられたムスヒの神であると考えてよいであろう。

ところで、このタカミムスヒに続いて、別天つ神の三番目にその名が記されているのがカムムスヒである。この神は、食物神であるオホゲツヒメの亡骸に化生した穀物などを、今後の栽培のための種として、おそらくササノヲに託して、葦原の中つ国にもたらせており、さらに、自らの子であるキサガヒヒメ、ウムガヒヒメを遣わして、兄たちに殺されたオホナムヂを蘇生させたり、自らの子であるスタナビコナに、すでにオホクニヌシとなったオホナムヂの国

作りを手伝わせたりしている。これらすべての記述が葦原の中つ国の生成や発展に関わるものであり、この点と、先程のように、タカミムスヒの「タカ」が事実上、高天原のことを指していると考えられる点とを考え合わせると、タカミムスヒは高天原の生成や発展に特化した神であると考えられるのではないだろうか。さもなければ、葦原の中つ国の生成や発展に関して、カムムスヒという神を別立てして登場させている必然性がなくなってしまうのである。

このように、太陽の光を司るということを前提に、高天原のムスヒとして位置づけられていると思われるタカミムスヒであるが、さらに高天原の統治者という側面も見出されると思う。その点で注目されるのが、葦原の中つ国への使者となったアマノワカヒコが弓矢を授けられた記述である。

日本の歴史上、将軍が紛争地に派遣されるとき、天皇から刀を賜るといふ節刀の儀式が行われていた。将軍は天皇から全権を委任された証として、その刀を授かるのである。古事記神話の記述では弓矢が授けられるので、節刀の儀式とそのまま同一視することはできないのであるが、授けたのが弓矢であるから、アマノワカヒコが射た矢が高天原まで飛んできて、その矢を巡る問題へと展開する話になるのであって、刀だと、そういう展開にはならないという話の進行上の要請も考えられるかもしれない。アマノワカヒコは高天原からの正式な使者として葦原の中つ国に遣わされたのであって、授けられた弓矢は、交渉が決裂して、戦いになったときに使う武器という意味合いもあるであろうが、節刀と同様に、全権を委任された証として位置づけられていると考えてよいであろう。

高天原に飛んできたその矢を、第四章で述べたように「タカキ」という名に変わったタカミムスヒが、「此の矢は

天若日子に賜へる矢なり」と述べていることから、<sup>(34)</sup>タカミムスヒがアマノワカヒコに授けていた可能性が高いであろう。この記述は、すでにアマテラスが名実ともに高天原の統治者となり、それに「タカキ」と改名したタカミムスヒが協力するという状況でのものではあるが、それでも、高天原の使者として天降るアマノワカヒコにそのような弓矢を授けたということは、アマテラスが高天原に統治者として昇ってくる以前には、タカミムスヒが高天原の統治者として君臨していたことを予想させるであろう。<sup>(35)</sup>

ただし、このタカミムスヒを高天原の統治者として捉える場合、注意しておかなければならない点がある。それはタカミムスヒが古事記神話の初めの記述において「独り神」「隠り身」であると述べられている点である。古事記神話において「独り神」「隠り身」という記述は各々三回登場するが、「独り神と成り坐して、隠り身なり」という形で、常にセットになって表れている。なお、正確に言うならば、タカミムスヒだけが「独り神」「隠り身」ではなく、<sup>(36)</sup>別天つ神として登場する五柱の神と、神世七代に登場するクニノトコタチとトヨクモノがそのような存在であると述べられているのである。

トヨクモノより後の、「独り神」「隠り身」であるとは述べられていない神々については、男女の性別が明示されていることから、「独り神」とは男性とも女性とも定まらず、そうかと言って、決して中性的というわけでもなく、特定の形で表象できないような在り方をしているものと推定される。それゆえ、「隠り身」を本来、姿をもっていて、それを隠しているという意味で捉えてしまうと、姿をもっている以上、男性か女性のどちらかの形にならざるをえな



くなるが、それでは「独り神」という記述と齟齬を来すことになるのである。「隠り身」とは、特定の姿に限定されない、あるいは、そういう姿を超越した在り方をしていると捉えるべきであろう。

したがって、タカミムスヒが高天原の統治者であったといっても、目に見えるような形で高天原を統治していたわけではないのである。事実、イザナキとイザナミが「修理固成」の命令を受けた際には、前述のように「天つ神諸の命以ちて」という記述になっており、また、イザナキとイザナミが国生みに失敗したため、高天原に戻って、助言を得ようとした際には、「天つ神の命以ちて」という記述になっていて、<sup>37)</sup>具体的に誰かが直接命令を下している形にはなっていないのである。

それはおそらく、預言者が神の啓示を受ける場合と似たようなものであって、目の前に姿形をもった神が現れて、何かを伝えるというのではなく、どこからともなく、その当事者に啓示という形で直接働きかけるのであろう。このように考えるならば、タカミムスヒが高天原の統治者であると言っても、それは文字通りに、姿形をもったタカムムスヒが高天原の統治者として君臨しているというように解釈されるべきではなく、タカミムスヒという存在そのものが高天原の生成や発展を押し進める意思となつて機能していたというように解釈されるべきであろう。

以上のように、アマテラスの誕生以前に、タカミムスヒという神が太陽神、高天原の統治者であったという可能性について、古事記神話の記述に基づいて考察したのであるが、もしこのように高天原に元々、統治者がいたとすれば、そこに統治者としてやってきたアマテラスはどうなるのであろうか。

スサノヲの昇天に対して、アマテラスが高天原を守るために立ち向かっていったという記述があることから、アマテラスが高天原の統治者として振る舞うことが神々から阻まれていたわけではないのであろう。また、スサノヲの乱行に関する記述で、大嘗を行う祭殿や神御衣を織る忌服屋が登場していて、アマテラスが高天原を代表して、神に新穀や御衣を献上していたことを思わせる記述になっているのである。したがって、高天原の神々がアマテラスという存在を全く認めていなかったわけではないのであろう。しかし、第一章で述べたように、アマテラスに協力しようとする形跡も見られないのである。

アマテラスが天の石屋に籠もってしまふや否や、神々が現れて、問題の解決に向けて様々な活動を始めている点から、高天原にはたくさんの神々が存在していて、当然、アマテラスの統治者としての振る舞いについても把握しているにちがいないであろう。しかし、その神々はアマテラスに協力したわけではない。いわば、息を潜めて、様子見をしていたのであって、高天原の統治者としての務めを果たそうとして一人で気負うアマテラスを遠巻きに眺めていたように推定されるのである。第一章で述べたアマテラスの孤立とは、イザナキが高天原の統治を委ねられ、昇天したものの、「隠り身」という目には見えない形ではあるが、タカミムスヒという高天原の統治者が存在していたため、高天原の神々の支持を受けることができなかつたということを示していると思われるのである。

それにしても、イザナキはなぜアマテラスを高天原の統治を委ねようとしたのであろうか。天つ神から「修理固成」という命令を受けて国生みをしているのであるから、当然、高天原の意思を体現する統治者がいることをイザナキは

知っていたはずで、それにも拘わらず、アマテラスを高天原の統治を委ねようとして、結果的にこのような事態を招いてしまったと言えるのである。無理を押しついで、アマテラスを高天原の統治者にしようとした理由については、様々なことを想定することができかもしれないが、筆者は以下に示す二つの可能性というものを考えている。

第一の可能性は、前述のように、タカミムスヒは高天原に特化したムスヒの神で、地上の世界の生成や発展には直接関わってはいないと考えられる点である。なお、古事記神話の後の記述で、タカミムスヒがアマテラスとともに、天つ神の御子による葦原の中つ国の統治実現のために行動しているが、これはタカミムスヒがアマテラスを高天原の統治者として認め、協力者となった後のことである。また、もし葦原の中つ国の生成や発展に関わるムスヒが必要であるならば、カムムスヒという神がいるのではないかと考えられなくもないが、カムムスヒは高天原の生成や発展に関わる神ではないので、高天原の統治者とは言えないのである。この世界で比類なく崇高な神、すなわち、それは高天原という比類なく崇高な場所に君臨する統治者ということになるのであるが、そのような神の権威を受け継いでこそ、葦原の中つ国の統治は可能となるのである。

第二の可能性は、葦原の中つ国の自立性を実現するという点である。地上の国土を形あるものにする出発点は、その時点では地上の国土がまだ未成熟であったため、当然、高天原にいる神がそれを命じるということに求められるのであるが、地上の国土がひとたび形あるものとなったならば、その国土はそれ自身で展開していくことが必要になるであろう。さもなければ、その国土はいつまでも高天原の操り人形のような存在に留まってしまいうからである。

古事記神話における重要な目的の一つは、地上にある葦原の中つ国、すなわち、後の日本という国を、その統治者の正統な由来を示すことによつて讃えるということにあつたと言えるであろう。そして、それを神話的世界における高天原のもつ權威に結びつけて確保しようとしているのであるが、単に高天原の權威を仰ぐだけでは、葦原の中つ国は高天原に追従する付随的な世界にすぎなくなつてしまふであらう。

このようにして、葦原の中つ国の統治者に正統性を付与しようするような比類ない崇高性と、高天原に一方的に追従することのない葦原の中つ国の自立性とを両立させるために、葦原の中つ国で生まれたアマテラスを高天原の統治者に据えようとしたと考えることができるのである。これはイザナキの意向によるものと神話上では位置づけているのであるが、実際には、タカミムスヒの孫がそのまま葦原の中つ国の統治者として天降りするという日本書紀本文神話の構想とは大きく異なる、古事記神話の重要な構想の一つであると言えるのである。

## 六 常夜とオモヒカネの登場が意味すること

アマテラスとスサノヲの間でウケヒが行われ、身の潔白が証明されたスサノヲは、第一章で述べたように、それ自らの勝利と履き違えて調子に乗り、様々な乱行に走っているが、それらについては以前、詳細に論じたことがある。<sup>(38)</sup> 本稿が扱う問題にとつて、それらは必ずしも本質的な事柄というわけではないので、これ以上の言及は控えてお

きたい。そして、古事記神話の記述は最終的には、スサノヲの乱行に恐れをなして、アマテラスが天の石屋(39)に籠もってしまふという形に展開するのである。

アマテラスが天の石屋に籠もってしまったために、常夜という事態になってしまった。この常夜というのは、「高天原皆暗く、葦原の中つ国悉く闇し」とあるように、太陽の光が射すことなく、ずっと夜の状態になってしまったことを意味すると考えてよいであろう。ただし、ツクヨミが存在していて、月の光は射す可能性があったであろうから、真つ暗闇というわけではないと思われる。

それに対して、高天原の神々が騒いで、善後策を考えるために集まっていることから、この常夜という事態はいまだかつて経験されたことがなかったものであると考えられる。そのことは当然のことながら、アマテラスが高天原に昇ってくる前にも常夜という事態が起こったことがなかったということを含意しているであろう。つまり、アマテラスが高天原に昇ってくる前には常夜という事態が起こったことがなく、アマテラスが高天原に昇った後、そのアマテラスが天の石屋に籠もると、初めて常夜という事態が起こったことになるのである。

このことは何を意味しているのであろうか。アマテラスが高天原に昇ってくる前に常夜という事態が起こらなかったのは、高天原にタカミムスヒという神が存在しているからであろう。タカミムスヒは太陽神として高天原に太陽の光をもたらしていたと考えられるのである。しかし、そのタカミムスヒが存在しているにも拘わらず、アマテラスが高天原に昇った後、アマテラスが天の石屋に籠もると、常夜の事態になってしまったのである。このことについては、

太陽の光をもたらす太陽神としての役割がタカミムスヒからアマテラスへと移行してしまったという可能性が想定されるであろう。太陽神としての役割がアマテラスへと移行し、そのアマテラスが天の石屋に籠もってしまったために、常夜という事態になったと考えられるのである。

ではなぜ役割が移行したかという点で、それは崇高性という点で、アマテラスがタカミムスヒを凌駕してしまったということが考えられるのではないだろうか。この世界で比類なく崇高なものとされる太陽に関わるのにふさわしいのは、神々の中でも比類なく崇高な神なのであって、古事記神話ではアマテラスをそのような神として位置づけようとしているのである。

第五章で述べたように、アマテラスが統治者として高天原に昇ってきた時、高天原の神々は拒絶しないものの、そうかと言って、アマテラスに協力することもなく、遠巻きに眺めているだけであった。それは高天原にはタカミムスヒという崇高な神が存在していたため、アマテラスの崇高性がまだ認知されていなかったからであると推定される。

しかし、アマテラスが天の石屋に籠もると、太陽の光が失われ、常夜という事態になってしまった。その時、高天原の神々はアマテラスが神々の中で比類なく崇高な存在であるということを否応なく思い知らされたのである。古事記神話における常夜という事態は、崇高性という点において、アマテラスがタカミムスヒを凌駕してしまったことを高天原の神々に知らしめた、という意味をもっているのである。

なお、先程引用した記述に見られるように、古事記神話では「葦原の中つ国悉く闇し」と、葦原の中つ国の状況に

ついてもわざわざ言及している点が注目されるであろう。古事記神話においては、生成や発展に関わるムスヒの神としてタカミムスヒとカムムスヒという二柱の神が登場しているのであるが、第五章で述べたように、ムスヒの神として、タカミムスヒだけでなく、カムムスヒを別立てしているのは、高天原のムスヒ、葦原の中つ国のムスヒという役割分担を考えていたからではないかと思われる。したがって、葦原の中つ国も高天原と同様に太陽の光が閉ざされてしまったということは、アマテラスの崇高性が、タカミムスヒだけではなく、カムムスヒをも凌駕してしまったということを示している可能性があるのである。

そして、このような常夜という事態を打開するために登場するのがオモヒカネという神である。この神はこの場面と、天つ神の中から使者を選んで、葦原の中つ国に送ろうとする複数の場面とで、いわば高天原のオビニオンリーダーのような形で活躍しており、最終的にはホノニニギに付き従って、葦原の中つ国に天降りする神でもある。オモヒカネについて何よりも注目されるのは、この神が古事記神話においてタカミムスヒの子であると明示されている点である。日本書紀神話の場合、本文神話にオモヒカネは登場するものの、タカミムスヒの子であるとは明示されていない。ただし、別伝神話（第七段の第一書）ではタカミムスヒの子であることが明示されている。第五章で述べたように、タカミムスヒはアマテラスが高天原に昇る以前に高天原の統治者であったと考えられる神であり、その神の子であると明示される形でオモヒカネが登場し、天の石屋に籠もってしまったアマテラスをそこから連れ戻すための計画について指導的な役割を果たしている。ということは、古事記神話におけるオモヒカネの登場は、タカミムスヒが自分を

凌駕してしまったアマテラスの崇高性を認めて、全面的に協力するようになった、という意味をもっているのである。

## むすびに

以上のように、本稿では古事記神話における天の石屋籠もりという話の意味づけを解明するために様々な考察をおこなった。イザナキから高天原の統治を委ねられたものの、アマテラスは高天原の神々の協力を受けることなく、孤立した存在であったこと（第一章）、そのアマテラスを高天原の統治者にすることが、イザナキに与えられた「修理固成」という命令の一環に位置づけられていること（第二章）、アマテラスの神的性格が太陽になぞらえられた比類ない崇高性にあること（第三章）、アマテラスが高天原の統治を委ねられたのは、葦原の中つ国の統治者に権威を与える意図があったということ（第四章）、アマテラスの誕生以前に、タカミムスヒが太陽神にして高天原の統治者であったと考えられること（第五章）、そして、常夜という事態を通して、アマテラスの比類ない崇高性が高天原の神々に認知され、オモヒカネの登場により、タカミムスヒがアマテラスに全面的に協力しようとする意思が示されたこと（第六章）、以上の点が明らかになったのである。

その後は高天原の神々が一致協力して、アマテラスを天の石屋から連れ戻すとともに、騒動の原因を作ったスサノヲを捕まえて、その乱行による罪のケガレを祓い、本来向かうべきであった根の堅州国に行かせたのである。その記



述では、スサノヲへの対応はいとも容易く行われているような印象を受ける。アマテラスがあればスサノヲの対応に困っていたにも拘わらず、高天原の神々がその気になれば、スサノヲの乱行など、いとも簡単に鎮めてしまったように感じられるのである。そのことは、アマテラスがかつて神々の協力を得られず、孤立した存在であったという第一章の指摘を補強するものとなりうるであろう。

しかし、アマテラスはもはや誰からの協力も受けることのない孤立した存在ではなくなつた。天の石屋籠もり後の古事記神話の記述では、アマテラスが高天原の中心的存在となり、そして、「独り神」「隠り身」であつたはずのタカミムスヒが顕在化して、その協力を受けることになり、<sup>(4)</sup>さらに、高天原の多くの神々を従えて、葦原の中つ国の統治者を定めるといふ目的に向かつて突き進んでゆくことになるのである。

したがつて、古事記神話において天の石屋籠もりという話は、イザナキによつて高天原の統治を委ねられたアマテラスが名実ともに高天原の統治者となつたといふ意味づけを与えられている、と結論づけることができるであろう。そして、そのことが、「修理固成」といふ命令の総仕上げとして位置づけられている、葦原の中つ国の統治者を權威づける大きな基盤を成立させたことになるのである。

(1) この話は「天の石(岩) 屋戸隠れ」「天の石(岩) 戸隠れ」「天の石(岩) 屋戸開き」「天の石(岩) 戸開き」と呼ばれることもあるが、この話で最も重要なのは、アマテラスが天の石屋に籠もってしまったということにあり、戸への言及はあくまでも付随的なものであると思われるので、本稿では「天の石屋籠もり」という呼称で統一しておきたい。

(2) 松村武雄著『日本神話の研究 第三卷——個分的研究篇(下)——』(昭和三十年、第一版・第一刷、培風館、四十六頁〜六十六頁)、次田真幸著『日本神話の構成』(昭和四十八年、第一版・第一刷、明治書院、百二十五頁〜百五十頁)、西郷信綱著『古事記注釈 第一卷』(昭和五十年、第一版・第一刷、平凡社、三四四五頁〜三四四十七頁)、倉野憲司著『古事記全注釈 第三卷上巻篇(中)』(昭和五十一年、第一版・第一刷、三省堂、百十八頁〜百三十一頁)、大林太良著『日本神話の起源』(平成二年、第一版・第一刷、徳間文庫、百十八頁〜百二十九頁)、寺川真知夫著『古事記神話の研究』(平成二十一年、第一版・第一刷、塙书房、百五頁〜百九頁)を参照。

(3) 岸根敏幸著『古事記神話と言霊信仰(前編)——「詔り別き」と「詔り別き」、および、ウケヒ——』(平成二十九年、『福岡大学人文論叢』第四十九巻・第一号、四百二十一頁〜四百二十二頁)を参照。

(4) 前掲の寺川真知夫著『古事記神話の研究』(二百四頁〜二百七頁)でも同様の指摘がなされている。

(5) 「修理固成」をどう訓読するかについては、校訂本や研究書によって様々であり、一致していない。それについては岸根敏幸著『古

事記神話と日本書紀神話』(平成二十八年、晃洋書房、二六六頁の注(48))を参照。ただし、訓読の違いが内容の理解に決定的な影響を与えるようには思われない。このような事情から、本稿では訓読を示さず、「修理固成」のまままで表記することにした。

(6) 日本書紀神話の場合、本文神話(第五段)ではこの三子にヒルコを加えていて、そもそもこの三子をつのグループとしてまとめている形跡がない。これに対して、別伝神話(第五段の第六書)は古事記神話の記述に類似しており、「三子」という呼称で、この三子に統治先を委任している。なお、古事記神話における「三貴子」の「貴」にほぼ相当するものとして、別伝神話(第五段の第一書)における「御寓之珍子」の「珍」(「うず」と読ませている)が挙げられるが、その記述の仕方から見ても、この形容はスサノヲには当てはめられていないと思われる。小島憲之、西宮一民他校注・訳『日本書紀1』(平成十八年、第一版・第四刷、新編日本古典文学全集2、小学館、三五頁〜三七頁、五十頁〜五十一頁、三七頁〜三十九頁)を参照。

(7) 大野晋編『本居宣長全集 第九巻』(昭和四十三年、第一版・第一刷、筑摩書房、百五十九頁)、倉野憲司著『古事記全注釈 第二巻 上巻篇(上)』(昭和四十九年、第一版・第一刷、三省堂、七十六頁〜七十七頁)、神野志隆光著『古事記「国作り」の文脈——「修理」「生」「作」——』(平成元年、『国語国文』第五十八巻・第三号)、水林彪著『記紀神話と王権の祭り 新訂版』(平成十三年、新訂版・第一刷、岩波書店、五十二頁〜六十頁)を参照。

(8) 現存する最古の写本である真福寺本を初めとして、多くの写本でこの部分を「淡海」、すなわち、近江としているが、伊勢本などのように「淡路」としている写本もある。小野田光雄編『諸本集成古事記(上巻)』(昭和五十六年、第一版・第一刷、勉誠社、

古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ(岸根)

百九十頁)を参照。『古事記』の校訂テキストでも、「淡海」としているものがほとんどであるが、田中頼庸校訂『校訂古事記』(明治二十年、神宮教院、十六丁表)では「淡路」の読みをとっており、前掲の西郷信綱著『古事記注釈 第一巻』(二百四十七頁)も「淡路」の方が正しいと強く主張している。ということで、容易に決着のつかない問題であり、本稿では二つの読みを併記することに留めたい。

(9) 前掲の大野晋編『本居宣長全集 第九卷』(二百九十三頁～二百九十四頁)、金井清一著「三貴子分治の神話について」(平成二年、『古典と現代』第五十八号)、前掲の水林彪著『記紀神話と王権の祭り』(八十五頁～八十八頁)、前掲の岸根敏幸著『古事記神話と日本書紀神話』(五十三頁～五十七頁)を参照。

(10) イザナキの構想が失敗したと指摘している先行研究もあるが、失敗したまま、何の対応もしないで隠棲してしまったならば、「修理固成」という命令の存在意義とその命令を与えた天つ神の威厳も失われてしまうのではないだろうか。前掲の水林彪著『記紀神話と王権の祭り』(八十六頁～八十七頁)を参照。スサノヲに海原の統治を委任させ損なつたという蹉跌はあったものの、イザナキは「修理固成」の命令を成し遂げたと筆者は捉えている。さもなければ、古事記神話においてイザナキが最終的には、「大御神」という最高の敬語を付加して呼ばれている理由の説明がつかないであろう。

(11) 日本書紀本文神話には「是に、共に日の神を生みまつります。大日靈貴と号す。此の子、光華明彩<sup>ひかりあや</sup>しくして、六合の内に照り徹る。故、二神喜びて曰はく、『吾が息多しと雖も、未だ此の若く靈異<sup>くすびにあや</sup>しき兒有らず』とあり、アマテラスが光り輝く比類ない存在であることが示されている。前掲の小島憲之、西宮一民他校注・訳『日本書紀1』(三十六頁～三十七頁)を参照。

(12) イザナキからミクラタナの神である御頸珠を授かったことで、アマテラスは穀霊としての靈能を付与されたという指摘がある。西宮一民校注『古事記』（平成十七年、第一版・第十九刷、新潮日本古典集成、新潮社、三百六十一頁の百四十四番「御倉板拳の神」の項）を参照。しかし、それはあくまでも象徴的な意味づけであって、太陽の光が農作物を実らせる上で不可欠なものであるという経験的事実を反映し、アマテラスの本質が太陽神であるという点からして、アマテラスと稲作との分かちがたい関係が予め成り立っていたと見なすこともできるであろう。

(13) 『日本書紀』の校訂テキストの中には、「大神」という同一の語を、指している神に応じて、「おほみかみ」や「おほかみ」と区別して訓読している場合があるが、元々の写本にそのような読み分けが指示されているならともかく、そうでないならば、それは恣意的な扱いと言わざるをえないであろう。さらに、そのような扱いをすると、古事記神話のように、日本書紀神話でも「おほみかみ」と「おほかみ」という区別がなされていたのかという問題を曖昧にしてしまう危険性もあるだろう。以下では、日本書紀神話に登場する「大神」という敬称の付いている神について、その「大神」をどのように訓読しているかを、本稿で参照した三種の『日本書紀』校訂テキスト、すなわち、坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注『日本書紀 上』（昭和四十四年、第一版・第三刷、日本古典文学大系67、岩波書店、「大系本」と呼称）、前掲の小島憲之、西宮一民他校注・訳『日本書紀 1』（『全集本』と呼称）、黒板勝美編『新訂増補国史大系 日本書紀 前篇』（昭和五十八年、第一版、第一刷、吉川弘文館、「国史本」と呼称）について調べたところ、次のようになっていた。

天照大神（第五段の本文など）——「おほみかみ」（大系本、全集本）、「をほかみ」または「をほん（む）かみ」（国史本）

古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ（岸根）

泉門塞之大神、亦の名は道返大神（第五段の第六書）―「おほみかみ」（大系本）、「おほかみ」（全集本）、「を、ん（む）かみ」

または「をほんかみ」（国史本）

住吉大神（第五段の第六書）―「おほみかみ」（大系本）、「おほかみ」（全集本）、「をほんかみ」（国史本）

伊勢に崇秘る大神（第七段の第二書）―「おほみかみ」（大系本、全集本）、「をほんかみ」（国史本）

紀伊国に坐します大神（第八段の第四書）―「おほかみ」（大系本、全集本）、「をほんかみ」（国史本）

猿田彦大神（第九段の第一書）―「おほかみ」（大系本、全集本）、「をほんかみ」（国史本）

(14) そのたった一回の例外とは、統治者として天降ろうとしていたアマノオシホミミが地上のただならぬ雰囲気を察知して、高天原に戻り、そのことを報告しようとした相手のアマテラスが「天照大神」という呼称になっている、というものである。そのような形になっている理由については、伝承過程において「大御神」の「御」が欠落してしまったと捉えるのが最も穏当な解釈のように思われ、すべての写本でそういう表記になっていることから、その欠落は伝承過程のかなり早い時期に起こったものと推定される。前掲の小野田光雄編『諸本集成古事記（上巻）』（四百四十五頁）を参照。ただし、「大御神」となっている写本が一つでも存在しているならともかく、すべての写本で「大神」となっている以上、「御」が欠落したとは容易に断定することもできないわけで、その点を考慮して、あえて古事記神話において「大御神」から「大神」への意図的な変更があったという前提に立つならば、次のように説明できるかもしれない。すなわち、比類ない「天照大御神」の権威によって、アマノオシホミミは統治者として葦原の中つ国に天降るはずであったが、それがうまくゆかなかったために、その権威が少し揺らいだと

いう意味で「天照大神」への降格という状況が生じてしまい、それに危機感を抱いた「独り神」「隠り身」であったタカムムスヒが顕在態として登場して、アマテラスに協力することにより、アマテラスの権威が元に復して「天照大御神」に戻った、というものである。ただし、このような理解はあまりにも技巧的で、不自然さを拭えないように思われるし、さらに、その場合、『古事記』「中つ巻」で二回出てくるアマテラスの呼称がすべて「天照大神」となっている点をどう理解したらよいかという問題も検討しなければならないであろう。

(15) 「照らす」は他動詞であるが、太陽や月については、「照る」と同じように自動詞的に用いられるという指摘がある。上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典 上代篇』（昭和四十三年、第一版・第二刷、三省堂、四百八十四頁の「照らす」の項）を参照。

(16) この点については、前掲の西宮一民校注『古事記』（三百五十六頁の百四十一番の「天照大御神」の項）、山口佳紀、神野志隆光校注・訳『古事記』（平成十六年、第一版・第六刷、日本古典文学全集1、小学館、五十二頁の頭注四）を参照。

(17) 日本書紀別伝神話（第九段の第八書）には「天照日照彦火明命」という名の神が登場する。「天照」を「天で照り輝く」と捉えるならば、当然、「日照」も「国で照り輝く」と捉えざるをえないが、同じ神が天でも国でも、その場所に居て、照り輝くというのには、理解に苦しむ点もあるであろう。天と国を場所ではなく、対象として捉えるならば、「天や国を照らし出す」という形で、無理なく解釈できるように思われる。さらに、この伝承の同一の文脈には「天饒石国饒石天津彦火瓊瓊杵尊」という名の神が登場している。この神名中の「天饒石国饒石」は「天に賑々しく、国に賑々しい」と解釈されているので（前掲の小島

古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ（岸根）

九二二

憲之、西宮一民他校注・訳『日本書紀1』（百五十五頁の頭注十二）を参照、同一の文脈にありながら、「天照国照」の「天」「国」については場所として捉え、「天鏡石国鏡石」の「天」「国」については対象として捉えるという不統一な解釈になるだろう。なお、「天照」を「天を照らす」と明言している先行研究も存在している。前掲の水林彪著『記紀神話と王権の祭り 新訂版』（四十一頁～四十二頁）を参照。

(18) 神野志隆光著『古事記の達成 その論理と方法』（平成十九年、第一版・第二刷、東京大学出版会、百二十三頁～百二十五頁）を参照。

(19) ただし、ユダヤ教の聖書『創世記』では、神が天地を創造した後に、光を成り立たせたとしている。つまり、天地の創造は暗黒のもとに行われたと捉えているのである。『創世記』（平成七年、第一版・第六十二刷、岩波文庫、九頁）を参照。

(20) アマテラスの誕生以前に、高天原と葦原の中つ国という二つの世界に関して、一日に昼夜の区別があったか、それとも、区別がなかったという二つの選択肢が考えられるであろう。まず高天原についてであるが、古事記神話の記述では、アマテラスが誕生する以前に光に関する描写はないので、明確なことは分からないものの、古事記神話に見られる具象的な思考方法という特色に照らし合わせるならば、高天原にも夜はあったと思われる。さもなければ、神を含めた生きとし生けるものは休息することを失って、生命活動を維持することが困難になるであろうし、日の出や日没もないので、時間の感覚自体が麻痺してしまう可能性があるだろう。そのように理解するならば、太陽の光が閉ざされ、月の光が射している夜を誰が司るのかというのが次の問題となるが、記述がない以上、論理的に考察してみると、タカミムスヒは生成や発展に関わるムスヒであるという点で



太陽の光に関わっているのであるが、夜もまた高天原に生きとし生けるものにとつては生命活動を維持する上で必要不可欠なものであり、なおかつ、ツクヨミのような夜に特化した神の存在も示されていない以上、そのタカミムスヒが夜をも司っているのではないかと思われる。そして、葦原の中つ国については、カムムスヒというムスヒの神が対応しているわけで、タカミムスヒが高天原の昼と夜を司るのであれば、カムムスヒも同様に葦原の中つ国の昼と夜を司っているということになるであろう。

(21) イザナキに付加される語が「命」から「大神」に変わり（禊ぎをする時）、その後にもまた「命」に戻る（三貴子を誕生させて喜んだ時）という記述がある。神話の内容に即してその都度、使い分けているとは考えにくいだが、そうだからと言って、単なる書写上の混乱であるとも断定しかねる点がある。今後の検討課題としておきたい。

(22) 沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校 古事記』（平成二十七年、第一版・第一刷、おうふう、四十八頁）を参照。ただし、訓読の一部を必要に応じて改めた。

(23) 「天照大御神」という神名の中では「大御神」が中心になっており、その点でイザナキやアヂスキタカヒコネとは決定的に異なるという指摘している先行研究もあるが、どうであろうか。太陽との密接な結びつきこそがアマテラスという神の本質であるとするれば、やはり「天照大御神」という神名の中で「天照」が中心と言えるのではないだろうか。前掲の西宮一民校注『古事記』（三百五十六頁の百四十一番「天照大御神」の項）を参照。なお、前掲の寺川眞知夫著『古事記神話の研究』（六十九頁～七十二頁）をも参照。

(24) 前掲の沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校 古事記』（五十頁）を参照。ただし、訓読の一部を必要に応じて改めた。

古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ（岸根）

- (25) 前掲の沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校古事記』(五十六頁)を参照。ただし、訓読の一部を必要に応じて改めた。
- (26) この点は日本書紀本文神話の記述と好対照をなすであろう。日本書紀本文神話では、アマテラスではなく、皇祖と位置づけられるタカミムスヒが、可愛がっていた孫に天降りをさせており、そこにアマテラスが介在している形跡は全くないのである。前掲の小島憲之、西宮一民他校注・訳『日本書紀1』(百十九頁～百二十頁)を参照。
- (27) この点についてはすでに論じたことがある。前掲の岸根敏幸著『古事記神話と日本書紀神話』(百五十四頁～百五十六頁)を参照。
- (28) 前掲の岸根敏幸著『古事記神話と日本書紀神話』(三十二頁～三十四頁、三十七頁～三十八頁)を参照。
- (29) 前掲の沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校古事記』(二十五頁)を参照。
- (30) 岸根敏幸著『日本の神話―その諸様相―』(平成二十九年、第一版・第五刷、晃洋書房、八頁)、前掲の岸根敏幸著『古事記神話と日本書紀神話』(七頁～九頁)を参照。なお、日本書紀本文神話では「高天原」と呼ばれるような世界は認められていなかったと断言する先行研究もある。神野志隆光『古事記の世界観』(昭和六十一年、第一版・第一刷、吉川弘文館、十二頁、六十一頁～六十二頁)を参照。
- (31) この問題については、前掲の大野晋編『本居宣長全集 第九卷』(百二十九頁)、前掲の倉野憲司著『古事記全注釈 第二卷 上巻篇(上)』(二十三頁～二十七頁)、前掲の西郷信綱著『古事記注釈 第一卷』(七十四頁)、西宮一民著『上代祭祀と言語』(平成二年、第一版・第一刷、桜楓社、三百八十一頁～三百九十一頁)、前掲の水林彪著『記紀神話と王権の祭り 新訂版』(四十頁～四十三頁)を参照。

(32) この問題については、前掲の大野晋編『本居宣長全集 第九卷』(百二十九頁)、西宮一民著「古事記『天照大御神』考」(昭和五十三年、『石井庄司博士喜寿記念論集』所収、塙書房、百三十頁～百三十一頁)、前掲の水林彪著『記紀神話と王権の祭り 新訂版』(四十三頁～四十四頁)を参照。

(33) この点については、前掲の岸根敏幸著『古事記神話と日本書紀神話』(九十一頁～九十二頁)を参照。

(34) 前掲の沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校古事記』(五十二頁)を参照。

(35) 本稿の第六章で扱っているが、タカミムスヒの子であるオモヒカネが高天原の神々の中で中心的な役割を果たしている点も、タカミムスヒが高天原の統治者であることを示唆していると言えるであろう。

(36) 前掲の沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校古事記』(二十四頁)を参照。ただし、訓読の一部を必要に応じて改めた。特に「隱身也」という原文については、大半の校訂本で「身を隠したまひき」(表現には校訂本により若干の違いがある)と訓読し、「隱り身」と訓読するのは前掲の田中頼庸校訂『校訂古事記』(二丁表)ぐらいであるが、本文で述べたように、「身を隠す」と理解すると、「独り神」という記述と齟齬を来す可能性が出てくるので、本稿では「隱り身」と訓読しておきたい。前掲の西郷信綱『古事記注釈 第一巻』(七頁)をも参照。なお、「隱り身」とし、「隱れ身」とはしないのは、上代に四段活用の「隱る」という動詞があり、それに基づいたからである。

(37) 前掲の沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校古事記』(二十六頁)を参照。

(38) 前掲の岸根敏幸著「古事記神話と言霊信仰(前編)——「詔り別き」と「詔り別き」、および、ウケヒ——」(二頁～十四頁、古事記神話における天の石屋籠もりの意味づけ(岸根)

十六頁～二十頁)、および、前掲の岸根敏幸著『古事記神話と日本書紀神話』(六十五頁～六十八頁)を参照。

- (39) この天の石屋については従来、自然に出来た洞窟のようなものを想定していると思われるが、本居宣長が注意しているように、「石」というのは建物の堅固を表すための語であつて、石で出来たものであるとは限らないであろう。たとえば、古事記神話にはトリノイハクスフネ(鳥之石楠船)という神が登場しているが、石で出来た船が船としての役割を果たすわけもなく、この場合の「石」というのは、船の頑強さを表す語であると理解されるのである。石屋を自然に出来た洞窟であるとすれば、そのような洞窟にきちんとした戸——外側から開けることができ、内側に籠もれば、鍵などをかけて、外からは絶対に開けられなくなるような戸——が設置されていて、その戸を開けて、アマテラスが石屋の中に閉じ籠もつたと捉えるのはかなり不自然と思われるからである。前掲の大野晋編『本居宣長全集 第九卷』(三百五十頁)、さらに、前掲の西郷信綱『古事記注釈 第一卷』(三百十六頁～三百十七頁)をも参照。ただし、天の石屋籠もりの後の話で、天の安の河の河上にあつて、イツノオハバリが住んでいるという天の石屋が登場している。これについては具体的な記述に乏しいので、堅固な建物なのか、文字通り自然に出来た洞窟なのか確定的な意見を述べることは難しいであろう。

(40) 前掲の沖森卓也、佐藤信、矢嶋泉編『新校古事記』(三十七頁)を参照。ただし、訓読の一部を必要に応じて改めた。

- (41) タカミムスヒ、そしてさらに、カムムスヒがなぜ顕在化したのかというのは古事記神話における大きな問題と言えるであろう。筆者は、そのような顕在化がアマテラスの天の石屋籠もりの後に、すなわち、アマテラスが名実ともに高天原の統治者となつた後に起こつたということが重要な点ではないかと考えている。この問題については後日、改めて論じたいと思う。